

詠む広場

毎日俳壇

小川 軽舟選

人の輪に母親探す子鹿かな

大和高田市 楠 伸治

△評▽奈良公園あたりの子鹿だらう。観光客の差し出す鹿せんべいに気をとられ、母親を見失ってあわてているようだ。

潮流の速きを読んで鮑海女

和歌山 神野 一馬

△評▽うっかり流されれば身の危険もあるに違いない。海女の眼光がふいに鋭くなった。

豆の花小橋渡れば旧城下

浜松市 野畑 明子

風鈴やホームひとつの無人駅

柏市 小畑 昌司

人知れず降りだす沖の夕立かな

札幌市 若林 陽光

日おもての往来しづか雲の峰

大阪市 吉田 昌之

朝顔や集落ひとつ人知れず

奈良市 浦城 亮祐

川石の稜踏み当つる素足かな

福山市 仲間 春海

ラジオ鳴る昼の下町冷さうめん

金沢市 岩本 卓夫

五月晴れ家みな南向いて建つ

町田市 練木 青藤

西村 和子選

人妻にお面買いやる夜店かな

始良市 井之川健児

△評▽こわく的な夜の店の灯が背景を彩り、小説の世界に引き込まれるようだ。そのお面をつけて歩く足取りが見えてくる妖しい句。

筍に串のすうと通りけり

尾道市 山口 恭子

△評▽料理のひとつまを詠んで、満足感と味覚の期待感を表した。固いタケノコなればこその手応え。

山門の先も石段時鳥

津市 渡邊 健治

傘立に残る四五本梅雨晴間

神戸市 岸下 庄二

そこらじゅうどこだみだらけ薬学部

東京 吉田かずや

病室に丸椅子二つ半夏生

下野市 石井 光

紅つつじ咲き満ちてやや毒々し

米子市 永田富基子

点描の十色を使ふ芽吹山

弥富市 富田 範保

川風の夜はひそやかに青胡桃

秦野市 林 ち島

更衣バストきりりと女子高生

野洲市 宮田絵衣子

井上 康明選

搾乳の乳房の並ぶ梅雨入りかな

豊田市 松本 文

△評▽朝の牛舎に、乳牛が搾乳を待っている。豊かな牛の乳房がひしめくように並ぶ姿に、梅雨入りを実感したのである。

思ひ出が此の山にありほととぎす

唐津市 梶山 守

△評▽かけがえのない大切な思い出だろ。その年初めてのホトトギスの声に、よみがえったのだ。

足元を見つむる歩荷雲の峰

葛城市 山本 啓

うすものの胸のスマホのまたたける

名古屋 可知 豊親

ゆるやかにくちなは遊ぶ木の根かな

札幌市 岡崎 実

夏まつり子供歌舞伎は口伝へ

弥富市 富田 範保

牛の舌音たて千切る髭草

東京 山口 照男

日へ闊志燃やして居りぬ夏薊

飯塚市 倉田 幸男

岩魚焼く嘉門次小屋の囲炉裏かな

東京 徳原 伸吉

ほつたるや自我あるごとくなきごとく

直方市 岩野 伸子

片山由美子選

瓷児をはみ出してゐる夏帽子

北本市 萩原 行博

△評▽はみ出すというのは、通常あまりよい意味では使われないが、ここでは夏帽子の華やかさを表現する言葉として効果的。

掛香の香り重たき雨催

加古川市 伏見 昌子

△評▽ビヤクダンやチョウジンなどは確かに軽やかな香りといえない。湿度が高いとさらに重く感じる。

わが庭に隣の庭に夏は来ぬ

春日市 林田 久子

蜘蛛の巣を払ひて蜘蛛を見失ふ

和歌山 神野 一馬

蜜豆を一口食べて母眠る

東久留米市 矢作 輝

シヨパン像立つ公園や風薫る

伊賀市 福沢 義男

せんべいにまだ振り向かぬ鹿の子かな

伊勢市 奥田 豊

奈良町の低き家並や釣忍

東京 徳原 伸吉

木道の先の黄しやうぶ朝日さす

愛知 高橋 一枝

美しきこと恐ろしき青蜘蛛

和歌山市 宮本 啓子

写実から写生へ 星野高士

調べの鼓動

「物をよく見て作れ」は俳句を始めた時にまず言われる言葉。これは俳句に欠かせないことでもあり、多くの俳人はそれを実行している。しかしながらただ見ているからといって、なかなか読み手に通じないこともある。そこは「写実」か「写生」の迷いがある。理解してくると違った結果になるのではないかな。

つまり、作り手の感情をなるべく入れないで作るのが「写実」。事実をそのまま詠むのであるが、単なる観察日記で終わってしまう可能性は高い。一方、少しの情感を入れて作るのが「写生」。しかし、デッサンのみで終わってしまう危険性があることは否めない。

その進化したのが虚子が言った「客観写生」。わかりやすくいうと、物を見るのは一緒であるが、作者の立ち位置を少し変えてみるということである。前方の物事を真っすぐ見るのであるが、少し角度を変えてみると、今までより違った景色がうまれていることに気づく。

・甘草の芽のとびとびのひとならび
・ひつばれる糸まつすべや甲虫

高野素十

写生句というと、これらが挙げられるが、写実から写生へ行くには作者の発した生の言葉が必要なのである。決して情をいれないというのではなく、客観写生とそれに伴う表現があつてその一句なのである。

高野素十の俳句は骨太な純写生句とも評されたが、そこは彼しか見つけられない小さくて大きい世界があつたからこそ、今でも揺るぎない写生句ばかりだ。

(はしの・たかし)俳人